

連載 1

赤い雪

辻本 千春

1

(なんか、へんやなあ)

と、秀子は思った。

もうあと少しで、女学校を卒業する前の年の暮れだった。

今日は玄関がいつもと違う感じがする。

大きな土間の玄関には、隅に白い木綿のカバーをかけた

二脚のイスと低い木製のテーブルがある。土間からの上が

りかま框は広く、横木は板の正目でつや光りしていた。

火鉢がある。けれど、この火鉢に火が入ることはめつた

にない。

なのに、今日は赤々と炭火が燃えている。

だから、ほんわり暖かい。

だから、いつもと違うと感じたのだろう。

(お客さんが来るんやろか?)

常日頃、訪ねてくる百姓は、土間のイスとテーブルで十

分事足りる。地下足袋のまま、いろいろ相談事や話したい

事があるからだ。

秀子の家も農家だ。

大柄な母は筋骨たくましい。その母が、一手に多くの田

畑を取り仕切っていた。

反対に、やせていくぶん母より背の低い父は、村長の仕事で忙しく、背広を着ることが多かった。

実際にこの家の主はまちがいに華奢な感じがする父親だった。肉體労働をするよりも、事務仕事をしているほうが多い父に対して、母は家のこと以外に口出しすることは一切なかった。

その父が、今日は男物のつむぎの着物に羽織という姿だ。日曜日でもないのに、上物の着物を着るなんて、どうしたのだろう？

父は上がり框の火鉢のそばで、手をかざしていた。

いつもどおり、玄関から一間ずれた脇入り口から、秀子は家に入る。居間へまわった。

「ごめんして」

玄関から、澄んだ声が聞こえる。男の人だ。

野良仕事をする近所のおばちゃんもおじちゃんも、台所の勝手口で事すますることが多い。

玄関先から現れるということだけで、上客だとわかる。

「はい。お待ちやして」

母は野良着ではなく、銘仙の着物（昭和初期の実用着）を着ていた。

体の大きな母は、野良仕事に精を出すからか、声はいつ

焼こう——それはかりだった。

「やあ、秀子。今日は、早かったやないか。もう、学校、おわったんか？」

上がり框からもどってきた母は、優しい声をかけた。

冬でもこまごまとした野良仕事がある母が、こんな時間に家にいることは少ない。

なんやら、こそはゆい。

「うん。私は裁縫が早いこと縫えたから、もう帰っても、ええて」

秀子は家に帰るとすぐ袴をぬぐ。そして、普段着の木綿の着物に着がえる。兄弟が多いから、次にまわさないといけないからだ。この袴も、姉幸代のお下がりで。

幸代には結婚相手が決まっている。

お相手は郵便局に勤めながら、土、日に野良仕事をして、給料はもらえらるし、米の心配もない人だという。ずんぐりした体つきで、前髪がすこし後ろに下がっているようだと、秀子には思えた。口にはしないけれど。

「そうか。よかったな。あんたは手先が器用やから」

めったにほめない母が、ほめてくれた。

秀子は次女だ。

幸代、秀子、高子、長男の泰治、五番目が茂代、次男で養子にでた茂市、おとんぼの末っ子は勝子だ。

もガラガラ声だ。

なのに、今日はとびきりお上品な声を出している。

秀子は思わず、ぶっと吹き出した。

秀子たち、家の者は、ふだんは玄関を使うことはなく、一間ずれた脇入り口を使う。そこは長靴や地下足袋や、すぐ履ける下駄などが散乱していた。

秀子は食卓のある居間から、玄関先をそっと覗いてみた。お客さんの横顔しか見えない。

たつぷりとした黒い髪でその横顔がおおわれて、はつきりとはわからなかった。

そして、紺色の背広を着ていた。

母が火鉢のそばに、座布団をおいてすすめた。

その人は、上がり框にふわりと座った。

父と、話を始めた。

声高でもなく、が、けつしてひそひそ声でもない。

よくはわからないが、『ふぎ』とか『ポーツマス条約』とか、聞こえてくる。

（このお客さんは？ いったいだれだろう？）

ちらっと、思った。

高等小学校をおえて、あと数カ月で女学校も卒業する秀子だけれど、政治の話は苦手だ。

とにかく腹の減ったのには勝てない。早く、かきもちを

七人兄弟の二番目なんて、母には歯牙にもかけないといふか、頭の隅っこにもないのだろうと思っていた。

秀子は、母親を、見つめた。

めずらしい。

ほほえんでいる。

さっと、秀子はうつむいた。

いつもと違うから、かえってどきまぎしてしまったのだ。

母はふたつきの湯飲み茶碗を二つ、お盆にのせて運んでいく。台所の土間から玄関の土間へではなく、座敷を歩きながら、上がり框にもつていくようだ。

（きつと、ええお客さんなんやろ。まっ、うちには関係ないわ）

秀子は台所のすぐそばの食卓近くにある火鉢に、網をのせて、かきもちを四枚もならべた。

この食卓は台所の土間と、板敷の居間と、二つにまたがってしつらえてある。

野良仕事の途中でも地下足袋のまま食べられるように、土間にある食卓の足は長い。主に、母や長男の泰治が土間側で食べる。ごくまれに、大工の家に養子に出ていった次男で弟

の茂市が田植えや稲刈りの手伝いのとき、食べることもある。父や、もうすぐ嫁にいく幸代姉が、座敷から続くこの板敷に座ることが多い。食卓の足は、ずいぶん短い。

よく考えて作られていると、秀子は思っていた。冬になると、板敷き側に火鉢が用意される。

種火を、灰の底深くに沈めておく。いつでも、すぐ赤々と火を起こせるように。

夜には、きつちり火を落とす。

兄弟が多いから、土間側と板敷き側と、座席争いだ。

今日にかぎって、秀子は一人だった。

どうしたことだろう？

(ふふっ。べつに。そんなん、どつちやでもええわ。なんかしらん。人がいないというのは、ええぐわいや)

秀子は炭火を起こし、一枚ずつ網の上に、かきもちをならべた。白いの、黒ごまのはいつたの、青のりのはいつたの。一枚だけうすーい桃色のかきもちがある。これには、砂糖と食紅が少し入ってる。

焼くときは、注意がいる。

砂糖が入っているので、こげやすいのだ。火箸でゆつくり、ゆつくり押さえながら、焦がさないように広げながら焼く。ほかのかきもちとは違って二倍半ふくれる。たまたまないほど、おいしい。

上手に焼けて、秀子は満足だった。

「秀ちゃん。それ、食べ終わったらな、これに着がえんねんで」

てないか、指先をお尻のあたりでふいた。

(ありがたい)とも、(おおきに)ともいうのを忘れるほど、うれしい。

両手で捧げもつように受けとった。

赤衣着物地に、黄色、緑色や青色の柄が描かれている。

なんて、きれいなんやろ!

なんて、モダンなんやろ!

「どうや? 気に入ったか?」

「うん、うん。もう、気に入ったもなんもない。ありがたいう! ありがたい! ほんまにお母ちゃん、ありがたい。」

おおきに」

秀子は赤衣着物を胸に抱いた。

(さつきは薄気味悪いなんて、思つてごめん)

「そら、よかったわ。はよ、着替えや」

母はもう一度、言った。

そして、台所に入った。

秀子は自分の部屋にかけこんで、赤衣着物に着がえた。

袖丈も、すそ丈もぴったりだ。

姉の幸代は、秀子よりいくぶん背が低いから、お下がりは手首がにゅういと飛びだすし、すそもつんつるてんほど短い。すそは袴の中にかくれるからいいけれど、手首がよつきり出るのはいやだった。

母は赤い銘仙の着物を捧げもつていた。

「へっ?」

母はいつだって、「秀子」と呼ぶ。それは、どの子にもだ。

それが、『秀ちゃん』。

おどろいたのと、なんだか薄気味悪い。

「それにしても、よお、食べる子やなあ。あんたは数えて十八歳。花も恥じらう乙女やのに、花より団子か」

「ちがうわ。満で十七歳や」

おいしい桃色のかきもちに、のどがつまりそうになる。もつたいない。秀子は一度口をすぼめてから、ゆつくり味わいながら、桃色のかきもちを食べた。

2

母は玄関の上がり框にお茶を運んでから、赤衣着物を出してきた。

「わたしに?」

「そうや。あんたのために、縫うたんや」

秀子は桃色のかきもちと、赤い銘仙の着物で、うれしさで、はちきれそうになる。

(ええんやろか? ええんやろか?)

秀子は焼けた白いかきもちを網の端によけて、手が汚れ

それに、姉はこんな華やかな色の着物は着ない。水色とか、紺色とか、わりとさびしげな色を好んだ。

(ああ。わたしの着物だ。はじめてだ。お下がりがじゃないなんて! 夢やないやろか)

姉と秀子の共通の部屋には、姿見がある。

鏡に映してみた。よく似合う。

ふと、思った。

(お母ちゃん、私の袖丈とか、すそ丈とか、知ってたんやろか? とくに測るってこともなかったけれど)

不思議に思いながらも、まるで測ったようにきつちりとした寸法に、(やっぱり私のお母ちゃんや)と、もう一度、感謝した。

「秀子、なにしてんのや? 手伝うてや」

大声ではなく、ふすまの外から母が呼んでいる。

「はーい!」

秀子は機嫌のいい声で、返事をする。

台所に行くと、白い割烹着をつけた母が、

「ああ。よう、似合ってる」

うれしそうに、秀子を見た。

秀子は、くるりと、一回転してみせた。

「うん、うん。かわいいわ」

母が目を細めている。

(こんな日もあるんだ。生まれて初めてやないやろか)
秀子は半分信じられないようで、半分幸せで、幸せで……。ふっと、一抹の不安を感じないでもなかった。

「これな、奥座敷にもって行って」

大皿にあふれるほど、たくさん柿の葉ずしがのっている。秀子は目を丸くした。

柿の葉ずしは、ふつつ秋に作る。今ごろじゃ、柿の葉は残っていない。それに、柿の葉ずしを作ったからといって、すぐには食べられない。三、四日たったほうが味がなじんでおいしくなる。

「柿の葉ずしなんて？ 葉っぱはどうしたん？」

「あんな。大事な事がある日のために、秋に塩漬けておいてあったんや」

母は一個の柿の葉ずしの葉をむいて、「ほれ」とわたしにくれた。

酢飯に、酢漬けたさばをのせて、長四角になるように、一個、一個、ていねいに柿の葉に包んでいく。

それを大きな木箱にきっちり詰め込んで、漬物石ほどの重しをかける。

秋祭りでも、お盆の集まりでもないのに、柿の葉ずしを、しかも秀子一人が食べている。

特別、おいしかった。

それにしても、今日はなんやろ？
なにか、あるんやろか？

いつもは、奥の二部屋の前のろうかには、雨戸がしめつきりだ。

それが、今日は二部屋分、六枚とも開けられている。

3

「ええか。いらつしやいませ、ていうんやで」

「うん」

「うん、ちがう。『はい』や」

「はい」

秀子は、赤い着物と、柿の葉ずしの味見で、いくぶん気もちが高ぶっている。

しんしんと底冷えのするろうかを、歩く。みしみしと小さな音が響く。そのたびに、胸の鼓動が速まる。

いつから降りだしたのだろう？

ガラス戸の外には雪花が舞っている。

(寒いはずや)

ふすまを開けると、畳座敷に絨毯じゅうたんをひいて、火鉢の炭が赤々と燃えていた。

「いつまで持ってたんのや？ はよ、そのおすし、おいてや」と、笑っている。

「あ、あ、うん。あ、あ、はい」

秀子は座卓のまん中に、柿の葉ずしをおいた。

「ありがとう」

その人は、そう言ってくれた。父もふくめて、男の人がお礼を言うことをあまり聞かない。

だから、新鮮な感じがした。

その人は柿の葉ずしをおいしそうに食べる。すぐ食べたのが、うれしい。

「めずらしいですね。今ごろ？」

(そ、そうやねん。私もふしぎに思うたんやわ)

母から聞いたことを伝えたいのに、うまく話ができない。「はい。秋のうちに葉っぱを塩漬けしとくんです……」

いつのまに入ってきたのか、母がお盆にお酒のとっくり運びながら、返事をしている。

なんとかか、なんとかか、話はずんでる。母がお酒を、その人にそそぐ。

今度は、その人が父にお酒をそそぐ。あつというまに一本が空かになった。

母が空になったとつくりを持って、台所へ行く。残ってしまった秀子は、手持ちぶさた。

奥座敷は、ほわーつと暖かい。
座卓にごちそうがならんでいる。刺身があった。山の田舎には、魚はとくにごちそうだ。
秀子は『いらつしやいませ』とも、『はい』というのも忘れた。

柿の葉ずしを差し出す。

「ありがとう。これ、大好きなんです」

玄関先の男の人だった。

顔をあげた。

(あつ！)

学校帰り、友だちの加代ちゃんと見た映画のポスターの俳優さんにそっくりだった。

すーつと鼻筋が通つてる。眉は黒く一文字に上がっている。目はきれいな二重まぶただ。

『愛染かつら』

田中絹代、上原謙。松竹映画 一九三八年。

映画を見たことはないけれど、ポスターのあまりの美しさにうっとりしたのだった。

俳優の上原謙に似ていた。その人は。

父がなにかいつてる。

「なに？」

その人は、ひよいと、柿の葉ずしを差しだしてくれた。
(やっと、出番がきた)

秀子はその柿の葉ずしをうけとって座卓の前に座って、
おいしく食べた。

母が、また、台所からとつくりを運んできた。

「今度は、秀子についてもらおか」

父が盃をつきだす。

「え？」

そんなことをしたことは一度もなかった。とつくりを持
つと熱かった。

ひゃっ。お酒がこぼれて、秀子は思わず立ちあがった。

母がふきんで拭く前に、その人が白いハンカチを出して
拭いてくれた。

秀子はなにもできずに、ただつつ立っているだけだ。

「ははっ。まだまだおほこいわ」

おほこいとは、幼いということだ。

(まあ、そうかもしれない。それでも、そんなん、この人の
前で、言わんでもええやんか。お父ちゃんいうたら)

秀子は唇をとがらせた。

その人はなにもなかったかのように、父と、また、政治
の話を始めた。

「せやかて、今まで、ずーっと東京弁やったのに。ふふっ」

「ほんまや。緊張してたんや。ほくも」

思わず、顔を見合わせてしまった。

ほーっと雪明りと、満月の月明かりで、暗くはない。

(やつぱり、きれいわ。この人)

家のひさしは長い。その下のセメントには雪がつもって
いなかった。

けれども、秀子は懐中電灯で足元を照らしながら、門ま
で案内した。

いつも閉ざされている門は、今日は開いていた。

秀子は「柿の葉ずしです。おみやげに」と渡すことがで
きた。門から、紀見峠の駅まではさほど遠くない。でも、

「雪が積もったし、懐中電灯、持って行ってください」

自然に、秀子はいねいな言い方になっていた。

「いいんですか？」

「はい」

「ありがとうございます」

その人も、きちんとした標準語で話して頭を下げた。そ
して駅にむかう。懐中電灯の灯りが、夏ぼたるのようになら
ちら光っていた。

秀子は家にもどりかける。

すると、急に、おしっこがしたくなった。

(なんか、優しいなあ、この人。お父ちゃんの友だちやろ
か?)

母が赤い銘仙の着物のたもとをひく。

それで、その場を母といっしょに出た。

しばらく笑い声や話し声が、奥座敷から伝わってきた。

「おーい。お客さんが帰らはるてー」

「はーい」

母が答えながら、柿の葉ずしを手ごろな紙箱につめる。

「おみやげにわたしてや。それで、もう外は暗い。この懐
中電灯もって、玄関から門まで送ってや」

4

玄関をでると、雪がつもっていた。

二、三センチはあるだろうか。

「雪、つもったんやー」

つい、秀子のはしゃいだ声をだした。

「ほんまや。いつのまにあに？」

その人も言った。

「ふふふっ」

「なんで？ なにか、おかしかった？」

その人が聞く。

冷えたからだ。

田舎のお便所は、外で、庭の端っこにある。ここからは、
かなり遠い。

(着物を汚したら、あかん)

秀子は、丸いこんもりした雪柳の木の下で、用をたした。

雪が赤くそまった。

初潮ではない。生理が始まったのだ。

5

秀子は部屋にもどって、すぐ生理の手当てをした。それ
から、木綿の普段着にきがえた。

「秀子。秀子」

ふすまの外から、母の声がする。

恥ずかしい。今、顔を合わせたくない。

「秀子。秀子。どうやった？」

秀子はふすまを押さえる。

「どうやった？」

「なにが？」

「あんじょう、おみやげ、渡せたんか？」

「うん。渡した」

「秀子。どうやったん？ ちょっと、ここ、開けてえな」

母のいぶかしげな声をする。

秀子は、より強く、ふすまを押さえる。

「もう坂上忠男さんに、ちゃんと挨拶できたんか？」

ふすま越しに、母がたずねる。

「だれ？」

「あんたの結婚相手やないか」

「えっ？ そんなん聞いてないやん」

「なに、いうてんのん。前にちゃんと言ったやないか。

ほんま。人の話、聞いてないんやから。この子おは」

そやったかな？ そやったんやろか？

赤い雪が、ちらちら、ちらちら、頭の中ではねまわる。

秀子はカーッと体が熱くなって、つぎにサーッと恥ずかしくなって、力が抜けていった。

母がふすまを開けた。

「なんや？ もう着がえたんか？」

黙って、うなずいた。

まだ、母は銘仙の着物だ。

「ちゃんと門まで懐中電灯で照らしながら、送れたんか？」

「うん」

「そいで、懐中電灯は？」

「雪がつもったから、持って帰ってもらうた」

「そうか。そら、そらあ、よかった。よかった。上出来や」

母は明るい顔になって、何度もうなずいている。

「なんで、ええのん？」

「そうかて、坂上忠男さんは、懐中電灯を、きつと返しに

来はる。その時、また、秀子と会う。会いたいつてことや

ないやろか」

（そう！ そういうことになるのん？ また会えるん？

忠男さんに。坂上忠男さんに）

ひらひら、ひらひら、赤い雪が、舞うようだ。

「もう、みんな、晩ご飯食べて、お風呂に入ったり、宿題

してるよ。はよ。秀子も食べや」

母がふすまの外へ出ていった。

あくる日の朝早く。

秀子は庭にでた。雪がとけていた。

雪柳ゆきやなぎの木の下に、ぼちつと黒い実みのようなものが残って

いた。

そつと、湿った土をかぶせた。

つづく